

浅い春

今や「生きる」ことを生きることもかなわず
浮ぶ雲には祈りさえなく
丘の斜面に寝転がりながら
僕には歌があるばかりだった

神が人となって幾久しく
既にして偶然は数式となっていた
そして残ったものは
人間以外の何があるう・・・

草々は風にその存在を流されるに任せ
大地の起伏は眠りの中に伝説を夢見る
私は耳を澄ます
滅びることを願う魂の呟きに

この目の前に白く輝く青い海・・・
そこには幾分かの後悔を流すことはできる
けれども誤解に満ちた哀しみは
決して浮き上がることはない

癒されることはあっても立ち去れはしない
忘れることはあっても捨て去れはしない
ならばまた探しにでも行こうか
あの埃っぽい白く乾いた道をたどって

(1990.3.18)